
シャイデレ！

紫水晃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャイデレ！

【Zコード】

Z3663E

【作者名】

紫水晃

【あらすじ】

ちょっととシャイな女の子に想われるコンチクショウな主人公に対して、純粋で一途なる想い……殺意を抱く物語 ではありません。まあ、読んでもらえれば分かります。興味のある方は、どうぞこの『シャイデレ！』の世界を覗いてみてください。安心してください。覗きだと訴えるつもりはありません。

プロローグ【ちょいとシャイな女のトト】（前書き）

勢いで創った。（全話制作時間五時間ジャスト）

今は心の奥底から後悔している。

短編にするつもりで創ったのですが、長くなりすぎて連載にしました。六話完結予定です。話の長さはちょいと切りの良いところで分けてるのでマチマチです。

では、どうぞお楽しみトト。

プロローグ【ちょっとシャイな女のト?】

朝日がようやく頭を見せ始めた頃の薄暗い時間帯。春はまだ始まつたばかりで、身を切るような肌寒い風に新聞配達の人も思わず顔をしかめるほど冷たく感じるこの時間帯に、……彼女はいた。

【飯石】という表札が掲げられた一軒家の前で、彼女は激しく脈打つ胸を押さえ、身体の火照りを抑えるように何度も冷えた空気を深呼吸して吐くのを繰り返している。

整った顔立ちは興奮のせいか朱に染まり、まだ真新しいセーラー服が青と白を基調にした色彩をしているので余計際立つて紅く見える。……そして服のサイズが少し小さいためか、スタイルの良い身体の凹凸もまた際立つて見えた。

そんな、一目で美少女だと納得する容姿を持った彼女の名は輝閃

月。

コウゲツ
聖帝第一学園の高等部一年生の十五歳である。

学園では『容姿端麗才色兼備しかも文武両道の完璧超人』だとが、『清楚で可憐な良妻賢母（？）』等と絶賛されている。他にもいろいろと呼ばれているが、うんざつするほど多すぎるので割愛するとしよう。

さて、そんな彼女がなぜここにいるのか。それは彼女が困ったことに、あ、いや、もう少し様子を見ていれば分かると思うので、

彼女の行動をもう少しだけ見てもらいたい。

みややく心の準備が出来たのか、彼女は最後に一呼吸軽く息を吸い込むと、キリッと口をつぐみ、顔を上げ、ゆっくり、ゆっくつと右腕を上げていく。

その先にあるのは玄関の呼び鈴。左手はいまだ胸の前に置いており、そこから自分の心の内へと一つ念じながら人指し指を作つていいく。

さあ、逸る心を落ち着けて。

そう自分に言い聞かせながら、彼女の微かに震える指が、静かに呼び鈴へと触れる

鬼のような連打だつた。

一階の窓から家の住人が怒声を発して間髪入れずに顔を出す。憤怒した表情ですぐさま辺りを見回すも、時既に遅し。人の姿はどこにも見当たらなかつた。

「ク、クソッ……！ またいない！ なんて逃げ足の早さだ！ いつたい誰がこんな嫌がらせを……！」

心底激怒した様子で悪態を吐くこの少年の名は出流^{イズル}。高校に入学した当日に突然父親が海外に出張に行くことになり、それに母親も一緒に付いていったため、現在この家で一人暮らしをしている。

当初、いきなり一人暮らしすることになりなにかと不安を抱いていた彼だったが、父親に『お前のことはある人に任せているから心配するな』と言われ安心していたのだが……。

高校に入学して今日まで一週間。誰も来ることはなかつた。しかも代わりにピンポンダッショウが毎日来る始末。

騙された！？

と氣付いてももう遅い。両親はとっくに海外へと飛び立つていて、その騙されたことの怒りに加え、毎日のようにピンポンダッショウをされているので彼の我慢の限界も近かつた。

「絶対見付けだして訴えてやるからな……！ あーー、もうーー まだ五時半じゃねーかよ！ ハア……もう眠れそうにないし……暇だし、弁当でも作つてみるかなあ……」

軽く溜め息を吐いてそっぽやくと、寝癖でボサボサになつた髪を搔き、開け放たれた窓から冷たい風が流れ込んできたので身を震わせつつ急いで窓を閉めた。

「…………

その様子を、計算され尽した絶妙な角度で電柱の陰に隠れてじつと眺めていた彼女は、やがて心底幸せそつた、見る者全てを虜にするよつな愛くるしい笑みを浮かべると、一言。

「おはようござります」

…………

学園では『容姿端麗才色兼備しかも文武両道の完璧超人』だとか、『清楚で可憐な良妻賢母(?)』等と絶賛されている彼女は、困ったことに、

ちょっと恥ずかしいな女の子スムカだったのです。

(ヘビウ)

第1話【弁当箱の悲劇】

「……ハア」

「およ？ 若者が随分とまあ不景氣な溜め息を吐いてんない」

聖帝第一学園一年A組の教室で、飯石出流の溜め息に友人の宮間祐一みやま ゆういちが反応する。

「どうした？ メロンパンを買つてくるのを忘れたのか？」

今は昼休み。いつも食べているメロンパンを出でず溜め息を吐く彼を見てそう勘違いしたようである。

「ああ。もうこやお前、珍しくない、四時限目とずつと寝てたよな。購買部に行くの忘れてたのか？」

「いや……違うよ。今朝もピンポンダッシュされたから少し寝不足なんだ」

そう言つて大きな欠伸をする彼を見て宮間は事情を察し、氣の毒そうに彼の肩に手を置いた。

「……また、やられたのか」

「……んと」「毎日だぜ……嫌になるよ……」

もう一度溜め息を吐く。誰かになんかの恨みを持たれたのか、それともただの悪戯なのか。あの呼び鈴の鬼のような連打からはどうかなかの判断できない。

「……でもまあ、朝のモーニングコールだつて思つて、諦めたらどうだ？」

アハハと無責任な発言をする友人にギロリとした睨みを向ける。

「……まさかとは思うが、お前が犯人じゃないだろ？」「

「……ククッ。わつわー。俺が犯人 いや嘘だ。すまん」

悪ノリしようとした富間だが、彼から本氣の殺意を感じたので真顔で謝る。

「そ、それよりお前つて飯あんのか？ ないなら一つわけてやるぞ？」

バツが悪くなり焼きそばパンを一つ取り出して寄越そうとした富間だが、彼が机のすぐ隣に置いてある学園指定の鞄の中から弁当箱を取り出したのを見て目を丸くする。

「あれ？ お前一人暮らしだから、…………弁当作つてきたのか？」

「ああ。暇だつたし、とりあえず作つてみたんだよ」

「え？ 飯石くん、お弁当作れるんだ？」

感心したように一人の話に入ってきたのは、隣の席に座っているクラス委員長の内藤美代子である。三つ編み髪の勤勉少女だ。友達と談笑しながら食べていたのを中断して、彼の弁当箱を見てくる。

「ねえ、少し中身見せてみてよ」

「いいけど……。かなり雑だぞ」

今朝作ったときの出来を思い出してそう呟く。玉子焼きやソーセージは適当に炒めているし、ご飯は水が足りなかつたせいが少し力チカチだつた。見栄えは良いものではない。

「いいからいいから」

「俺も見せてくれよ」

あまり見せたくはなかつたのだが、興味津々な内藤と宮間に促されるように彼はしぶしぶと弁当箱を開いた。

瞬間。

「…………は？」

「…………へ？」

「…………え？」

出流、内藤、宮間の三人の目が点になる。このとき、一瞬だが確かに時も止まつたと思う。

呆然と固まる彼等の田の前には、真っ白なご飯の真ん中に玉子焼きで描かれたでかでかとしたハートマークと、

「イズル 激LOVE」

とケチャップで書かれた文字があった。

「…………」

辺りに重い沈黙が包む。それを作り出した当人である出流は、なにこれ？ なんで？ どうして？ と答えのない疑問をグルグルと頭の中で回したまま、まったく思考が働かない状態で停止している。

「…………はっ！？」

そこでふと視線を感じて顔を上げると、田を見開いて呆然としている内藤に、生暖かい田でこちらを見てくる富間といつからいたのか数名のクラスメイト達の姿があつた。

…………そこでようやく、これは第三者から見るとイタイ人にしか見

えなにことに気が付いた。

「ち、違……！」

彼が急いで否定の言葉を口にする前に、クラスメイト達は口々に勝手なことを言い始める。

「ハーテマークか……」「

「朝早く起きて、せっせと自分宛てにハートマーク……」

「悪しき者も……」

「しかも「イズル 激LOVE」って……。どんだけ自分が好きなんだよ……」

「お前つて、ナルだつたんだな……」

言いたい放題だつた

誤解だ！ 俺は」んなの作ってない！」

「でもお前が、おき作ってきただって……」

「わしゃねえよ！」

「はいはいわかつたわかつた。そういうことにしてやるよ」

「だからそういうことなんだつてー。」

まったく信じようとしないクラスメイト達にビックリしない絶望感を抱きながら、彼は激しい怒りと共に吠えた。

「チクショオオオ！！ 誰がやったんだアアアア……！」

それはまるで負け犬の遠吠えのようだ。ただ虚しく教室の中に響いただけであった。

「…………」

その様子を中等部の屋上から双眼鏡で眺めていた彼女は、“出流の弁当箱と全く同じ形の弁当箱”を片手に、ニッコリと、一言。

「どうぞ召しあがれ」

(\wedge,\wedge)

第2話【大切な思い出】

「クソ……。本当、誰がやつたんだよ……」

六時限目終わり頃。思ったより早く授業が終わったので残りの時間を自習で費やすことになり、生徒達が思い思いに楽しそうに雑談している中で彼だけが真剣に悩んでいた。

ちなみに、あの弁当は結局食べている。内藤に『食べないの？勿体ないから食べなさい』と叱咤され渋々口にしたのだ。……悔しいことに、かなり美味しかったそうだ。

「鞄はずっと足元に置いてあつたし……可能性があるとすれば、三時限目の休み時間の……俺が寝てたときなんだよな……」

彼は田の前の席で帰つ支度を行つてゐる友人の宮間に話しがけた。
「……なあ、祐一。俺が寝てたとき、誰かが来て勝手に俺の鞄に触れたりしなかつたか？」

「誰かがって言われてもなあ……」

教科書を鞄の中に詰め込む手を止めしばし思案する宮間。

「後ろなんてあんま見ないし、よく分からん

「……そつか」

脱力して机の上に突つ伏する。

彼の席は一番後ろの窓際の近くにある。あまり目立たないところなので、やれりうと思えば誰にも見られずにこいつそり入れ替えるのは可能だろ？

「内藤は……」

隣の席なのでなにか知ってるかなと思い隣を見るも、友達と談笑中だったので遠慮することにした。

「……ああ、そりいえば誰かは来てたな。それも珍しい人が」

突然の富間の含みのある発言に、彼は怪訝そうに眉をひそめる。

「誰だよ？」

すると西畠はニヤニヤとしたいやらしい笑みを浮かべ、

「輝閃さんだよ」

と呟つた。

「…………へ？」

その名前に一瞬だけ胸が跳ねる。

「輝閃さんって……隣のクラスにいる、あの輝閃皐月さん…？」

彼が再び問い合わせるも無理はない。

輝閃皐月とは、容姿端麗才色兼備しかも文武両道の完璧超人で、男女分け隔てなく人気のある学園のアイドルである。多くの男性からの憧れの的であり、彼もまた例外ではなかった。

「ああ。内藤さんと来月の文化祭の話をしながらクラスに入ってきたんだ。なぜか学園指定の鞄を持ってたのが不思議だつたけど。それは足元に置いて、ちょうどお前にお尻を向けた状態で内藤と話してた」

「マ、マジかよ……」

彼は無念そうに肩を落とした。もちろんお尻が見えなくて残念がつていてるわけではなく、輝閃の姿が見られなかつたことが残念だったのだ。起きていれば良かつたと後悔する。

「いやあ眼福だつたね。やはり美少女つてのは見るだけで心が癒されるなあ」

「……なんで起こしてくれなかつたんだよ」

富間が自慢するように言つてくるので唇を尖らして文句を口にする。輝閃さんの姿を一目見ていれば、この陰鬱とした気持ちが少しあは晴れていたかも知れないのに。

「すまんすまん。輝閃さんの良い匂いをかぐのに夢中で気付かなかつた」

「富間はどつやうじにフチ（変態寄り）のよつだ。」

「にしても、輝閃さんつてヤバイぐらい綺麗だよなあ。好きな人がいるらしいけど、……そいつが羨ましいや……」

「くつ？」

その富間の咳きに彼は驚きの声を上げる。

「輝閃さんつて、好きな人がいるのかー!?」

「ん？ ああ。先週十七人ぐらいに告白されでは振つてるんだけど、全員に『私、好きな人がいるんです』って言つて断つてたから間違いないんじやないか？」

「……そ、なのか」

少し……いやかなりショックだつた。彼女に仄かな恋心を抱いていた彼は少しだけ失恋の痛みを噛み締める。やがて平静な顔を浮かべると、富間の話の続きを耳を傾けた。

「フッ。これでも輝閃臥月ファンクラブの副会長だぜ？ 彼女のことならなんでも知つていて。例えば彼女のスリーサイズは、バスト不明ウエスト不明ヒップ推定八十七だ！」

「全然わかつてねーじゃん！ しかもなんでヒップだけ推定で数字だしてんだよ！」

「俺の好みの問題だ！」

断言する富間。「いつもハッキリ言わると馬鹿じけ聞こえるのはなぜだろ？」「気のせいには違いないのだが。

「もちろんちやんとした情報もあるが。小学二年生までは俺達と同じ学校に通っていたとか」

「え、 そうなの？」

彼と富間は中学校を卒業してから聖帝第一学園の高等部に入学しているクチである。

「ああ。で、四年生になつてからここに転校してきたそうだ」

「えりく中途半端だな」

「なんか都合があつたんじゃないか？ さすがにプライバシーなことは詮索するのよくないから輝閃さん【聞けなかつたけど】

「……つて本人に聞いてたのかよ」

どうやら全ての情報は本人に直に聞いていたようだ。……つまりスリーサイズは教えてもらえなかつたのだろう。

「輝閃さん、二年生まではいたんだな。……まったく覚えてないや

「まあ、お前はその頃女遊びに夢中だつたしな」

「……なんだよそれ

冷やかすよつな時間の口づつこマツトする。

小学三年生の頃、彼は毎日のようにある女の子の家によく遊びに行っていたのである。その子は体が病弱なため外で遊ぶことができないので、一人でおまかじをしたり、話をしたりして時間を過ごしていた。

ある日突然、その子がいなくなるとのとあまで。

「毎日毎日、俺の誘いを無視して女に会いに行くなんて、薄情な奴だなあなんて思つてたなあの頃は」

「……仕方ないだろ。約束したんだから」

もう当時のことすらとしか覚えていないが、その女の子と約束していたことだけはハッキリと覚えている。

病弱で外に遊びに行けず、学校にも稀にしか来れなかつたので友達がいなかつたその子が可哀想で、幼い彼はわざわざその子の家まで赴き、面と向かつてハッキリと言つたのだ。

俺がお前を友達にしてやる。だから、毎日遊びに来てやるよ。

どうしてそんな行動をしたのか。その理由は覚えていない。ただ、

遊びたい盛りだった彼から推察するに、……もしかしたらその子に對して淡い恋心があつたのかも知れない。

その子とは一ヶ月も経たないうちに別れることになり、当時はことは深く記憶付けられていないので真相は分からずじまいである。

「……そんな」とより、輝閃さんの好きな人の情報は入っていないのか?」

自分の話からそれとなく逸れるようにならうとしたが、面識は深く沈んだ表情で答えた。

「教えてくれなかつた……！」

「……少しは自分で調べろよ」

と、そこで終業のチャイムが鳴り、委員長の号令で礼が終わるや否やクラスメイト達がそれぞれ帰り支度をし始める。

「なあ、出流」

余計なものは持つてこないので弁当箱以外なにも入っていない学園指定の鞄の中に教科書を入れようとしているが、先に帰り支度を整えていた富間が最後に一つ聞いてきた。

「なに?」

「もしも輝閃さんの好きな人が分かつたら、どうあるんだ?」

「そんなの、決まってるだろ……」

その問いに、彼は若干の微笑を称えて答えた。

「そんな幸せ者、この手でぶつ殺してやるよ」

どうやら彼は真相を知ったとき自殺するやつだ。

(つづく)

第3話【それは失恋なのか】

「……マズったなあ」

すっかり薄暗くなつた廊下を歩きながら出流はそっぽやいた。

さつさと帰るひつとしていた彼だったが、暇潰しに何気無く寄つた図書室で『山羅くんの不幸』という実話を元にして創られた小説を発見してしまい、別に読もうとも思つていなかつたのになぜか体が勝手に動いてそれを手に取り、今まで読み耽つてしまつていたのである。さすが“読んだ者までも不幸にする物語”と銘打つてゐるだけのことはある。もう一度と読むものかと彼は誓つた。

でも主人公の山羅くんつてホント可哀想だつたなあ……、と見たことのない実在する少年に若干の哀れみを感じながら廊下の角を曲がり、靴箱に差し掛かつたところで彼は思わず立ち止まつた。

(……話声?)

女の子の話声に一瞬だけ躊躇したのである。大事な話をしているところだつたら悪いし。

それはそれで良い心掛けかも知れないが、耳を澄ましながら前屈みでこつそりと様子を伺つその姿は盗み聞きをしている姿としか思えないのだが。

「…………それで、どうして好きになつたの？　あの人のこと」

しばらくして、喧騒のない夕暮れの校舎に静かに澄み渡るようになり、彼の耳にそんな声が響いてきた。

（うわ……恋愛事かよ）

彼は更に出来るに出られなくなつた。女子の恋愛話は男子には少し気まずいものがあるのだ。

…………それにしてもうこの声、どうかで聞いたことあるような。

それが気になり、だんだんと覗き込むように彼の体が前へと傾いていく。もはや完全に盗み聞きスタイルであることに気付いていない。

やがて、こちらに背を向けている女子の姿が視界に入った。この後ろ姿は……内藤？　三つ編みに、さつきの声から同じクラスの内藤の姿が噛み合つ。

そして、もう一人。

（あ、あの人は……！）

限界ギリギリまで覗き込む彼の視界に、内藤と向かって立つ女子の姿が、見間違えようもなく飛び込んできた。

見田麗しき顔立ち。プロポーション抜群の身体。

見間違えるはずがない。

(輝閃犀円さん……！)

密かに憧れる想い人の姿に彼の胸が一際大きく高鳴った。

(……え、ちょっと待てよ。つてことは、……まさか、輝閃さんの好きな人の話をしてるのか……？)

さつきの声が内藤のならそれが妥当だわ。……それに、ここから見える彼女の顔は、内藤の言葉に對してどり答えようかと悩み、頬を赤らめて恥ずかしげにはにかむ恋する乙女の表情に他ならなかつた。

(…………)

彼は複雑な気持ちになり、彼女の顔から田を擡げるようになつ向いた。聞いてみたいと思う反面、聞きたくないといつ氣持ちも強くあり、その葛藤があつたのだ。

「……私が昔、病弱だったこと、知ってるでしょ？」

しかし彼のその葛藤を打ち消すように、凜とした響きのある声が聞こえてきた。それにハツとして顔を上げる。

「……そのせいで学校に行つても友達が出来なくて、いつも教室に一人でポツンと座つてゐるだけだった」

そんな彼女の独白に、彼は少なからず驚いた。スポーツ万能でなんでも出来るから、てっきり昔からそつだと思っていたからだ。

（輝閃さんつて、昔は病弱だつたんだな……）

彼は彼女の言葉に、ふと今日久しぶりに思い出すことになつたあの女の子のことを思い浮かべる。

あの子は今、どこでなにをしてゐるのだろうか。

「……学校には稀にしか行かず、ほとんど家で過ごししているだけだつたから、このままずっと学校に行きたくないつてあの頃は思つてた。……でも、それだとお姉ちゃん達が寂しそうな顔がするから、元気なときは我慢して学校に通つてたんだ」

だけど、と。

そこで、それまで寂しそうに語つていた彼女の頬に、僅かに赤みが差す。

「……そんな私にも、小学三年生になつてよつやく初めての友達がひつん……」

首を振り、恍惚とした表情を浮かべ、そしてまるで神に祈るように手を組み、うつとりと、微笑んだ。

「……運命の人に出会えたのー。」

その姿に。

(……ああ)

と。彼は肩をガックリと落として溜め息を吐く。

ああ、……そうか。彼女はそんなにも、その人が好きなんだな……。

そこには入り込む余地などヨクト単位ほどにもないと、見せ付けられた。それもう、完膚なきにまで。

「……でもね、せっかく運命の人に出会えたのに、たった一ヶ月で私は転校することになったの」

そう言つて彼女は哀しそうに視線を落とした。

(……一ヶ月?)

彼は彼でなにかが引っ掛かったのか、その単語に視線を落として考え込む。

「え、と……確か輝下小学校から転校してきたんだっけ?」

その内藤の思ひ出るよつに発せられた声に、

(へ……?)

と彼はハツとして顔を上げた。

輝下小学校というのは、彼が小学生時代に過ごした学校の名称なのだ。

(……え、えーと、つまり?)

心臓が早鐘のよつに脈打ち始める。思考は焦りでままならなくな
り、落ち着かせるよつに胸に手を置き、最初から順番に整理していく。

彼女は自分と同じ輝下小学校に通っていた。

しかも、病弱のため稀にしか学校に行けなかつた。

そして、……小学三年生になつてよつやく、友達が出来た。

それも一ヶ月の間だけ。

(まさか……?)

そこから導き出されるであらう答へに、彼は「クリと生睡を呑み

込む。

「……でも私は今でもハツキリと覚えてる。たった一ヶ月の間だつたけど、あの人と一緒に過ごした大切な日々のことを」

(……まさか……)

あの一ヶ月は、彼にとつても大切な思い出の一つ。彼女に笑顔を向けられるだけで、ムズ痒くなるような、思わず笑い出したくなつてしまつようなあの気持ちが、『恋』だと知らなかつた幼き日の思い出。

「……そして、一人ぼっちだつた私を救つてくれた、あの人のお言葉を」

(……まさか……！－！)

それは、彼が今でもハツキリと覚えている言葉。

二人の、思い出の言葉。

あの言葉が、今まで、彼女の口から再びつむがれる

「俺がお前を“奴隸”にしてやる。だから、毎日口キ使ってやるからなこの雌豚が！」

思い出が台無しだつた。

彼は声なき絶叫を上げた。口をこれでもかというぐらい大きく開けている。

（それ絶対俺じやねえッ！ だつて俺、友達にしてやる、つて言つたんだから！ つていうかなんという鬼畜！ 小学生にして恐ろしいガキだなあオイ！）

まさか小学二年生にしてそんな鬼畜発言するような奴がいるとは
世も末だ。……それがまさか自分が言つたことになつていて彼が
知つたらどんな反応を見せてくれるだろうか。

（……にしても、そんなことを言われてもあんなにも想つての輝閃さんもかなり変わってるよなあ）

かべる。
と思いながらも、それだけ想つてゐることか、一人苦笑を浮

「ほ、ホントにあの入つてそんなこと言つたの？」

彼女の好きな人を知つてゐるらしい内藤が信じられないといった口調でそう聞いた。

「本当だよ。私はその言葉を聞いて一瞬であの人の虜になつたんだから」

……ま、まあ、なにはともあれ。

彼女がその人を愛していて、そこに入り込むことは決して出来ないことを知つただけで彼は満足する。

（……だけど、まだ好きでいることぐらいは、いいよな？）

彼女に好きな人がいて、しかも純粋にその人のことを一途に想つていることを知り、哀しい気持ちで一杯だったが、それでも祝福してやろうと彼は思う。

だけどそれでも諦めきれない気持ちはあった。だからせめて、その人と結ばれるまでは好きでいさせてほしい。

そして彼女がその人と結ばれた日には、……泣くかも知れないが、精一杯祝つて、スッパリと諦めよう。

まあ、もし相手が富間だつたら殺してしまつかも知れないが。

そんなことを本気で思いながら五歩ほど後ろへ下がる。そして、わざとらしい足音を鳴らしながら、今来ましたという感じで姿を見せた。

「え、飯石くん……！？」

するといきなりを振り返った内藤の驚く顔が視界に入り、

「…………えう？」

彼の突然の登場に呆然とする、彼女の表情が視界に入った。

「…………あ、ああ…………う、う…………？」

顔がまるでヤカンが沸騰していくように真っ赤になり、目には涙が浮かんで瞳が潤み出す。

「へ？」

その不思議な表情の変化に、このまま通り過ぎようとしていた彼も思わず立ち止まつた。

「あ、…………ああああうううううう…………」

彼女がいやいやと首を振つたかと思えば、すぐ近くにいた内藤の背中に周り、まるで彼の視界から逃れるように隠れた。

「えー……ヒ……」

彼は酷く傷付いた表情をして内藤を見る。目が合った内藤は気まずそうにしながらも、彼を慰めるようにフォローをした。

「…………」この子はね、えーと、ちょっと人見知りが激しいというか、恥ずかしがりやなのよ。だ、だから気にしなくていいよ?」

アハ、ハ……。内藤の乾いた笑い声が虚しく辺りに響いた。

「ハハ、ハ、そ、そうか。うん。わかった。じゃあ、俺はこれで」

そう言いながらチラリと内藤の背中を見る。こちらをチラチラと窺っていた彼女と目が合い、『ひう!』と顔をボツと真っ赤にすると顔を隠された。

「…………」

俺つて嫌われてたんだ。そう勘違いした彼はいたたまれなくなり、涙目を見られないようにすぐに顔を背けると、靴箱から自分の靴に履き替え、足早にこの場から立ち去った。

やがて泣きながら走り出すことになるのだが、それは一人が彼の姿が見えなくなつてからである。

(ג'ג'ג)

第4話【彼女の決意】

「……行つちやつたよ、飯石くん」

そんな内藤の呆れた声に反応して、背中を両手で掘んでいた彼女はようやく手を離し、顔を上げた。

「そ、そんな……」

田元を涙で真っ赤にさせた彼女は哀しそうに肩を落とした。

「どうして……？ ベリして行つひやうの……？」

「……あなたがみんな反応をするからでしょ」

はあ、と溜め息を吐ぐ。

「……だ、だつてえ。……だつてー。」

人指し指と人指し指をシンシンと合わせながら、上目使いで内藤を見る。

「……恥ずかしかつたんだもん」

……つまりは、そういうこと。

なぜ彼女が、ストーカーまがいの行動をしているのか。

その理由が、それ。

ただ単に、恥ずかしかつただけなのである。

「まつたく……」

腰に手を当て、この恥ずかしがりやの友人を改めて見る。

彼女と知り合ったのは、ちょうど彼女がこっちに引っ越してきた頃のこと。近くに良い医者がいるということで来たらしく、それはある意味では正解だつた。病弱だつた体はまるで嘘だつたかのようになん気になり、聖帝第二学園小等部に入つてからは今まで皆勤を更新中。

医者が言つには心の変化によるものだつとこつこと。それは引っ越したことによる環境の変化がもたらしたのか、それとも彼と別れたことによる心の変化が原因なのかは、分からぬ。

ずっと友達として一緒にいた内藤には、彼女がどれほどまでに彼のことを愛しているか嫌といつほび知つてゐるので、おそらくは後者だと思つてゐる。

それに今では才色兼備で文武両道の彼女だが、それは生まれつき

備わっていたものではなく、『出流様のために強く、美しくなりたい』という努力の賜物だ。

そうして彼と再び会える日が訪れるまで自分を磨いていたというのに。

こぞ会えば、どうしようもなしに怖い怖い怖い怖い、と怖じけついて声すら掛けられない始末。彼も、彼女が変わり過ぎていて仕方ないが、すっかり忘れていたりするよつて感動の再会といつキッカケを得られない状況である。

なお、余談だが小学生の頃も頻繁に告白されていた彼女が、『この身体は全て出流様のもの』と言つて断つていたのをやめさせたのは内藤である。内藤のおかげで、『お前が出流か……殺す!』といつ闇討ちになる自体を免れたと言つても過言ではないだろう。

そんなことを思しながら、落ち込んでいる彼女に詰問するよつて聞いた。

「それから、あなたでしょ? 飯石くんの弁当箱をスリ換えたのは

それに対しても彼女は、パア、とまるで花が咲いたような幸せな笑顔で元気良く頷く。

「うん! えへへー。自信作なんだー」

そのとろけるよつてな笑顔に、同性である内藤も思わずめいじしまつ。反則なほどの可愛さだった。

「……口、口ホン。き、今日は私が食べなさいって言つたから渋々

食べてくれたけど、もうあんな渡し方はやめなよこな

あんな渡し方といつのは、鞄」と入れ換えるといつ荒業のことである。彼の眠つている休み時間に、わざわざ鞄を持ってきていたのはそのためだ。もちろん、彼が鞄の中身を弁当箱以外空にしていることを事前に知っているからこそその業である。

……まあ、なぜ今日初めて作ってきたはずなのにあの弁当箱を使用されるのを知っていたのかはミステリーだが。

「で、でも……」

「でも、じゃない。やるなら手渡しにしなきこ

「そんなことしたら、私死んじゃう。」

「死ぬなー。」

なんといつ恥ずかしつぶり。内藤は額を手で押さえて上を仰ぎ見た。これは先が思いやられる。

「……そんなのだと、いつか別の女の子に飯石くんを取られかけつわよ」

「……え……？」

内藤の溜め息混じりに向気無く呟いた言葉に、彼女は一瞬固まり、

「……え、えぐ。……ふ、ふええええん……」

床に座り込むと、なんと本氣で泣き始めた。

「ち、ちょっとびづいたのー?」

まるで自分が泣かしているよつで焦る内藤。

「だ、だつて、ひつぐ、み、美代子ちゃ……んが恐ろしい」と、つ言つんだもん……」

「そ、それはそつなるかも知れないって例えのことよー。ほら、泣きやみなさい!」

よしよしと頭を撫でる。まるで子供扱いだが、ビことなく子供っぽい彼女には適切な対処かも知れない。その証拠に、だんだん落ち着きを取り戻してきた。

「……そ、それに、えぐ、だ、大丈夫だよ

涙をハンカチで拭いていると、彼女は内藤にそう告げた。

「大丈夫って、なにが?」

なんに対しての大丈夫なのか分からず、聞き返す内藤に彼女は答えた。

「もし、……もしもだけど、有り得ないけど、絶対に有り得ないけど、有り得るかも知れないけどほぼ百パーセント有り得ないけど、たとえ宇宙が滅びてしまおうとも、」

前置きが長すぎる。内藤は彼女の頭を軽く叩いた。

「イタ。……え、えと、も、もし、出流様に彼女が出来ても、大丈夫なの！」

出流様……。聞き飽きてる内藤にとつては慣れているが、他の人が聞いたらかなりの誤解を抱きそうな呼び方である。

「なんで大丈夫なの？」

まさか、殺すから、なんて言わないよね？ そんなことを言い出したらどうしようかと思ったが、それは杞憂だつた。

「私が出流様の彼女に『愛人』になれるように交渉するから」

なぜならそんなことよりも更に厄介なことを言い出したからだ。

「……するな！」

とりあえず、頭を叩いておいた。

「イタ。……そ、それに、それだけじゃないもん！」

それはもう自信満々に言い放った。

「だつて私、出流様のお義母様とお義父様に『息子を任せる』つてお願いされたんだから！」

なんとなくおかあ様とおとう様の発音に違和感を感じたが、それは無視する」として内藤は当然の疑問を口にする。

「……いつから、飯石くんの『両親と面識を持つたの?』

「出流様が入学したその日、出流様に話し掛けたことが出来なかつたので家に侵入したんだけれど、そのときに出流様の御両親と面識を持つたの」

「凄い。なんと云つてか、話し掛けたことが出来なかつたから家に侵入するといった思考回路が。

「そ、それであなたはなにを言つたの?」

だいたい予想できるが聞いてみる。

「『お願いしますお義母様お義父様。私を出流様の奴隸にしてください』って土下座したの」

予想通り。

「そ、それを聞いて飯石くんの『両親はなんて?』

「お義父様は『喜んで!』と手を叩き、お義母様は『息子をよろしくお願いしますね』と私を撫でてくれた……」

嬉しかつたのか、えへへ、と頬を弛める。

「へ、へえ……」

それは予想外の反応。

「それで、『海外に出張に行くから息子をよろしく頼むよ』と頼まれたから、私が毎日出流様の家に赴いているんだ」

……そう。

彼の父親が言った、ある人、とは彼のことだったのだ。

だから彼女が、彼が寝坊しないようにと毎日ペリンポンダッシュ…
…もとい、朝のモーニングコールをしていたのだ。あながち、宮間の言葉は間違えではなかったのである。

「でも、だからと書つたって……」

白痴するような彼女に、宮間は冷静に忠告する。

「あなたがその飯石くんにだけシャイな性格になるのをどうにかしないこと、こつまでもこのままよ」

「もつともな言葉。

」
「うん」

それはどうやら彼女も十分承知しているようで、そのためには自

分のこの性格をどうにかしなければと危機感を抱いているらしく、
彼女はグッと拳を握ると、なにかを決意したように強く頷いた。

(つづく)

ヒローゲ【未来（れき）はまだまだ】れかの】

「…………はあ」

ベッドの上で寝返りしては溜め息を繰り返すのも何度目のことだ
わづ。

まあ、それも無理もない。密かに恋していた彼女に実は好きな人がいると聞かされ、しかも本人からハッキリと肯定され、そして挙げ句の果てに自分を嫌っていると気付いて、かなり落ち込んでいるのだから。

それが誤解であることを知る由もない彼は、自分が彼女に対してなにをしたのか思い浮かべてみる。話をしたことすらしていない相手に、あんなにも嫌われてしまつような理由つてなんなんだ？

もちろん見付かるはずもないのだが、自虐的になつている彼には誤った理由が次々と思い至りてしまう。

（まさか輝閃さんを見るこの目がイヤラシかったとか？ 僕の顔が見るに堪えなかつたからか？ それともまさか、俺の存在自体に嫌悪してゐるんぢや……？）

案の定、更に気持ちが重くなつてしまつ。目を潰そうかな、なんて呟くのでもはや末期症状にまで陥つていた。

しかし、そんな状態になりながらも、心の片隅にあるのは昔のことは。

久しぶりに昔のことを思い出し、あの女の子と彼女の姿がなぜか彼ってしまうのだ。別人なのに。なぜこいつもちらつくのだろう。それとも、自分はあの子に会いたいと思つていいのだろうか。

そりやあ、正直言えばまた会つてみたとは思つてこない。会つてどうしたいかは良く分からないうが、とにかく、一回でもいいから会つてみたいと思つ。

そこまで考えてから、ふと白痴氣味に笑つた。

「女らしいな、俺」

そう口にしてゆつと目を瞑る。瞼の裏に視界が閉ざされ、闇だけの世界が広がつた。

なんにもない暗闇だけの世界。なんて面白みもないのだろう。

そんなハつ当たりじみたことを思いをしながらしばらぐすると、……やがてその世界に、ボウと浮かび上がつてくるようにあの子の姿が現れてきた。

(え?)

といつ疑問を浮かべる間もなく、その子の周りの状況もまたおぼる氣に浮かんでくる。

どこの家の、誰かの一冊。

おままで」とをして遊んでいるらしい彼女は、ただ一人の遊び相手に向かってお願いをしていた。

「……ねえ、出流様。お願いがあるんだけど、いい?」

「い、出流様?」

なんて呼ばせ方をしてるんだとガクリとしちゃうくなる。と同時に、これは夢なのだとすぐに気がつく。

……一睡余いたいと思つてたらこわかよ。

いつもハツキリと夢だと分かる夢は久しぶりだ。明晰夢のようなものだらうか。……でもまあ、なかなか粹なことをしてくれるじやないか、俺の脳も。

「お願い?」

彼女の言葉に首を傾げるのは幼い自分だらう。なんなんだらうと興味津々で先を促していた。

「……う、うん。あ、あの、……あのね!」

勇気を振り絞り出すように、彼女はその“お願い”を口にした。

「大きくなつたら、私と結婚してくれる?」

.....。

.....ああ、あつたな。そんなことも。確か。うん。そう言われたよくな、気がする。

子供じみた大胆な告白に虚を突かれるも、なんだか無償に微笑ましくなつた。あー、あー、そういうこともあつたつけなー。なんだか氣恥ずかしいや。

えーと、それで俺つてなんて答えたんだっけ?

.....んー、と、うん、そうそう。なんか、軽くオーケーの返事をしたと思つ。

彼はそんなことを思い出していたが、夢の中の彼は全く違つ言葉を口にしていた。

「嫌だ」

否定の言葉。それに驚愕する彼に、傷付いた表情をする女の子。

そして更に彼は続ける。

「だつてお前は俺様の“奴隸”だもん。身のほどを知れこの雌豚が」

「この鬼畜野郎オオオ！」

そう涙ながらに殴りかかったといひで悪夢の鐘が彼の脳裏に響いた。

「ピンポン……。

「……！？」

一瞬にして覚醒。枕元の時計を見る。五時半。窓の外はまだ薄暗い。来やがつたなピンポンダッシュユ野郎取つ捕まえてやる。ベッドから飛び下りる。窓の鍵を開ける。息を吸い込みながら窓を解き放つ。

「来やがつたなこの野郎オオオ……オ……オ、お？」

最初の怒声も一気に尻すぼみ。彼は目をパチパチと瞬かせた。

「……から見える玄関前の人影は、見間違えではないのなら、輝閃
輝閃さんではなかろうか？」

（え、なな、なに？　なんで輝閃さんが？　え？　犯人？）

そう思いながら、改めて周りを見て状況の把握に努める。そういえば、呼び鈴は一回しか鳴つていなかつたよつた。それに五時半だけ、今は朝ではなく、夜なのでは？

「…………」

「…………」

困惑しながらも、いつたいなんの用なのだろうとドキドキしてい
る彼に、

決意を込めながらも、それでも躊躇して言えず「ドキドキしてい
る彼女。

……そんな、二人の姿を見て分かることは、ただ一つ。

それは、一人が両思いだと氣付くのにはう時間は掛らないだろう、
とこうことだ。

(おわり)

……にしたいのだが、

「む

それだけで黙り込んでしまう彼女。

む?
」

そして思わず聞き返す彼に向かって、

と子供が駄々をこねるような泣き叫ぶ声が貫く。

「へ?
え?」

彼はポカンとする。しかも彼女は五メートルほど後ろに離れて見守っていた人……内藤に向かつて駆け、すぐさま彼から見えなくなるように背中に隠れた。

「駄目ッ！ 無理ッ！ あの人顔を見たら（頭が真っ白になつて）なにも言えなくなつちゃう！」

彼の硝子のハートが釘バットで粉々になつた。

「な、なに言つてるの！ 覚悟を決めた、って言つから付いてあげたのになにもしないつもり！」

「だ、だつてだつて！ あの人話しつけられたりでもしたら（恥ずかしさのあまり）死んじゃうもん！」

更に追い討ちをかけるように粉々になつたハートがブルドーザーで細かく潰されていく。

「ホントにもう！ なんでこいつときは意氣地がないのよ！ 来なさい！ 私が無理矢理でも連れていつてあげるわ！」

「い、いやあああ！ 助けてえ！ 助けてえ！…」

俺の家はどこのヤクザの事務所か？

塵になつた硝子のハートを扇風機で遙か彼方に飛ばされた彼は、ここから落ちたら死ねるかな、なんていう危険なことを真剣に考え始めている。

嫌だ嫌だと泣き叫ぶ彼女からは、本当に彼のことが好きなのだろ

うかといつ盤問しかない。

ただ、内藤が今まで感じていることは。

奇しくも、この物語の締めとなる言葉と、一致していた。

どうやら、一人が結ばれるのはまだまだ先のことになりそうだ。

(おわづ)

ヒュローゲ【未来（れも）せまだまだ】れかの】（後書き）

『どうもー。

はじめましての人ははじめまして。

お久しぶりの人はマジお久しぶり！

紫水晃です。

えー、このある意味では私自身初めての完結作品であるこの『シヤイデレ!』楽しんでもらえたでしょうか?

シヤイで『テレな女の子の話でしたかな? そのまんまでですね。ホントはヤンデレにしようと思つたのですが……自重しました。

えーと、実は短編として出そつと思っていたのですが、私には話を長引かそうとする悪い癖があるようで、結局、連載という形にしました。

最初の前書きにもあるように、この物語はマジで勢いで創った作品のため、そしてマジで五時間ジャストで創ったため、誤字脱字があるかも知れません。しかも更新日である今日創りました。なんとプロットからこの後書きの……まあ『どうもー』のところまで。

え、仕事? 明日もあるがなにか?

いや、なに。本当に久し振りに思い出しましたが、物語を創るつて面白いですね! もう時間を忘れるくらいに。だから、後悔はこれっぽっちも……『ごめんなさい嘘です。今まさに後悔しているところです。

それから、作品のどこかにあつたと思いますが、別作品の『山羅くんの不幸』をちゃつかり宣伝している私はダメ人間だらうか? まあ細かいことは気にするなと自分で自分で慰めているからもう立ち直りました。うん。ホントだよ……?

とまあくだらないことばかり述べてきましたが、ここまで読んでくれた読者の皆様に感謝の意を! 感想? そんなものあつても成

長できない私には不要！ 他の作品に感想をあげなさい！ „シャープペンシルを武器にする』ような萌萌えなところや『先生は17歳！？』という疑問系だから偽りだなと怪しむところや『力力の天下』なんていう力力ア天下のことかーとクリンを殺された怒りをもつようなどころやまと他いろいろ！ すまない他の作品たちよ！ 真っ先に浮かんだこの三つでもう限界だ！ みんな平等にしたいが無理だ！だからせめて、この俺が応援しまくってやるぜええええ！

……はあ、疲れた。

それじゃ機会があればまた会いましょう。

ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3663e/>

シャイデレ！

2010年10月10日15時49分発行